

令和4年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：ネギハモグリバエ（ネギ・ラッキョウ）

令和4年4月15日
鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

- (1) 4月15日現在、ネギハモグリバエの越冬蛹からの羽化および、園芸試験場西園ほ場において被害葉が確認されました。
※羽化調査：東部ネギほ場から3月16日に採取したネギハモグリバエ越冬蛹からの羽化は百葉箱内（園試）で観察。越冬蛹を管ビンに静置し、羽化个体数を計測した。
- (2) 本種は蛹の形態で地表または地中で越冬します。昨年度秋期に被害が多発したほ場では、被害が大きいことが予想されますので、食害痕の観察と発生初期の防除を徹底しましょう。

2 発生生態と被害の特徴

- (1) ネギハモグリバエの成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または地中で蛹になる（図）。
- (2) 令和3年にネギほ場において、葉に激しい食害を引き起こすバイオタイプBの発生が全県下で確認されている（令和3年度病害虫発生予察指導情報）。
- (3) 従来の系統（以下、バイオタイプAとする）では、1葉当たり1～数匹程度で加害するのに対し、バイオタイプBでは1葉当たり10匹以上の幼虫で集中的に加害する傾向がある。バイオタイプBに食害されると、ひどい場合は葉全体が白化する。
- (4) ネギハモグリバエは、鳥取県では年6回成虫が発生すると推定されている（鳥取県農業試験場）。弓浜地域では、4月下旬にタマネギ畑で初発が見られ、5月下旬以降、集中的にネギ畑に飛来・産卵する。6月中旬頃には発生のピークとなり、7～8月に密度が高まる。ラッキョウ畑では5月中旬、9月中旬に発生のピークが見られる（中原ら、1968）。



図 ネギハモグリバエ（左下：被害発生ほ場、右上：幼虫の食害、下：成虫）

3 防除上注意すべき事項

- (1) 現在のところ、ネギハモグリバエの系統による違いで薬剤の効果が異なるとの報告はないため、防除薬剤は各地域の防除暦等を参考にする。
- (2) 被害葉及び収穫残さは、二次伝染源もしくは越冬源となるため、ほ場内に放置せず適切に処分する。

表1 ネギハモグリバエに登録のある薬剤

作物名	農薬の名称	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	有効成分	IRACコード
ネギ	マラソン乳剤	1000倍	収穫7日前まで	6回	マラソン	1(B)
	アグロスリン乳剤	2000倍	収穫7日前まで	5回	シペルメリン	3(A)
	ダントツ粒剤	3～6kg/10a	収穫3日前まで	4回	クロチアニジン	4A
	アルバリン粒剤	6～9kg/10a	収穫3日前まで	合わせて2回	ジノテフラン	
	スタークル粒剤	6～9kg/10a	収穫3日前まで			
	ディアナSC	2500～5000倍	収穫前日まで	2回	スピネトラム	5
	アグリメック	500～1000倍	収穫3日前まで	3回	アバメクチン	6
	コルト顆粒水和剤	2000倍	収穫3日前まで	3回	ピリフルキナゾン	9(B)
	リーフガード顆粒水和剤	1500倍	収穫7日前まで	2回	チオシクラム	14
	ハチハチ乳剤	1000倍	収穫7日前まで	2回	トルフェンピラド	21(A)
	ベネビアOD	2000倍	収穫前日まで	3回	シアントラニプロロール	28
	グレーシア乳剤	2000～3000倍	収穫7日前まで	2回	フルキサメタミド	30
	ファインセーブフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	2回	フロメキン	未
ラッキョウ	ビリーブ水和剤	1500倍	収穫14日前まで	3回	シハロトリン ジフルベンズロン	3A,15
	プレバソンフロアブル5	2000倍	収穫3日前まで	3回	クロラントラニプロロール	28

表2 ラッキョウで作物登録があり、ネギでネギハモグリバエに登録がある薬剤

作物名	農薬の名称	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	有効成分	IRACコード
ラッキョウ	アグロスリン乳剤	2000倍	収穫3日前まで	5回	シペルメリン	3(A)
	ディアナSC	2500～5000倍	収穫前日まで	2回	スピネトラム	5
	ダントツ粒剤	6kg/10a	収穫21日前まで	2回	クロチアニジン	4A
	アルバリン粒剤	6kg/10a	収穫前日まで	合わせて3回	ジノテフラン	
	スタークル粒剤	6kg/10a	収穫前日まで			

表はラッキョウでのアザミウマ類に対する登録内容を記載